

11 足立長雋の祖為春先生と 乗附為春海鏡

石原 力

足立長雋^{しゆん}学、松浦道氏校定、平井厚篤、植本文達筆記『産科輯要』（研医学会蔵）七丁裏の「辨胎児在子宮中状」に「吾祖為春先生享保十八年崎陽ニ遊学ノ寸蘭人ニ対語シ胎児ノ子宮中ニアル状如何ト問シ寸、蘭人答曰妊婦百日内ノ者ハ手足ヲ縮メ仰キ居ス。百日外ニ至ルヤ児頭下辺ニ向ヒ児ノ背脊ハ妊婦ノ腹ニ当ル。又児頭上辺ニ在ル者モ間アリト云云」という記述がある。妊娠中の正常胎位についてはこれより三十二年後の明和二年（一七六五）刊『子玄子産論』に記されている賀川玄悦の「背面倒首」（背前胎向・頭位）が「曠古」（基礎銘）の説とされていることは周知の所である。玄悦のこの発見は、賀川明孝著『賀川玄悦の系譜とその周辺』によると一七四〇年よりも後である。従って一七三三年（享保十八）に妊娠中の正

常胎位如何という問題意識をもち、長崎へ赴いて直接蘭人から背前胎向・頭位という回答を引き出した為春は、進取の気象に富み、並々ならぬ産科の学識を具えた人物であった。

私はこの為春が乗附^{のつげ}流産科で知られる乗附^{いしゆん}為春の誰かであろうと考えて、先ず乗附家の調査を行い、昨年の九八回総会で「乗附氏家系と乗附流産科」を報告した。乗附家の伝承では乗附三喜齋昌純が天文年間（一五三二〜一五五）長崎で紅毛来舶医^{カスバル}賀姿^{カサバ}婆^バ伝来の外科を受け、内・外科を兼療し子孫に伝えた（安中乗附氏位牌）とあるが、ザビエル来日が一五四九年、三喜齋の曾孫寿徳院法印玄由の没年が一六一三年であるから年代的に誤りである。しかしこれは後世の事実の反映か、少なくとも乗附家の蘭方医学に対する強い関心を示唆するものといえよう。玄由の子女頭（源五郎）の長男玄可の系統は上州安中に住み代々医を業とした。

弟左馬丞は為春齋と号し乗附為春家の初代で、産科で有名な三位法眼槽尾久牧の門に入り、見込まれて家名、医法、重器を相続、槽尾為春と称し女科を主とした。後

糟尾某に重器を還付し乗附氏に復した。小田原北條家に仕え、武州榛沢(埼玉県岡部町)に住み、一六三七年没した。二代為春は忍藩(埼玉県行田市)阿部正能に医を以て仕え、三代為春通称玄寿(法名陽山)(一七四三年没)を経て、四代為春幼名馬之助号海鏡諱衛達に至る。

海鏡(一七〇二—一九〇)は著述、門人が多いが江戸深川阿部邸で生まれ、一七一一年十歳で父を失い家督相続で為春を名乗り、四人扶持を与えられた。法眼河野良以の門に入り、師の名を頂き以春と改称、忍に帰って医道を義兄雨宮勝蔵から学んだ。勝蔵は三代為春玄寿の甥で四代以春の姉婿であり、以春を後見して乗附玄寿号文山と称した。もと阿部侯の儒官であったが三宅尚齋の事件(一七〇七)に連坐して辞任し、四方を周遊西は長崎に至ったと伝えられている。忍へ帰り医を業とした。享保十七年(乗氏累代小伝、吾家代々法号)もしくは十八年(乗附氏系図)の五月十八日に没した。文山は傍系で為春を称したことはなく、十八年に長崎行は無理で「為春先生」ではない。四代以春海鏡は享保十七年十月六日十人扶持に加増、十八年十月十五日侍医格に拔擢されて十五人扶持を与え

られた(五年後侍医となる)。この一年の間に三十二歳の海鏡の長崎往復は可能であり、文山の契めと逝去がその機縁で、また長崎行が拔擢に繋がったことも考えられる。

しかし乗附家に残る資料にも児玉幸多編『阿部家史料集、公餘録』にもその記載はない。所が九代為春春海(一八三九—一九〇八)編の『乗附家伝類聚 附腹診法』(京大富士川本)の「飲食傷」の項に海鏡の著書『長崎夜話』からの引用があり、海鏡の長崎行、従って「為春先生」の確度は高い。情況証拠はそうであるが、現在海鏡と長雋を結ぶ糸は系図面で見付かっていない。ただ海鏡の妻が大野武助の女、長雋の妻嘉代が老中太田資愛の家臣大野渥美の養女で、偶然の可能性が強いが大野姓の一致が目される。

(賛育会清風園診療所)